

# 聞名仏教

第137号 毎月発行  
(発行日) 2022年2月1日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒663-8113 西宮市甲子園  
口2丁目7-20  
JR 甲子園口駅下車歩4分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp 振替「東本願寺  
護持基金」00930-7-146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み  
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月18日午後6時30分始

## 悪を転じて徳とする

佐々木蓮磨

ません。全く私の恐ろしい自性が出てやった仕事です」とハッキリ答えました。

ある夏の夕暮れでありました。

りました。

と、父親のWさんが顔を洗っているところへ突如として次男が縄をもって、Wさんの首を絞めにかかったのです。そこでWさんは、思わず次男をケツ倒し、おまけに次男の持っている縄を取り上げて、次男を絞め殺したのであります。

私は公判のとき、証人として呼び出され、本人の人物や日ごろの行状などについて尋ねられたので、私はありのままのことを語り、特に彼が「たとい次男がいかに乱暴をしても、私はそれに対して決して暴力は加えない」とまで誓っていたことを述べました。裁判長も彼の心情をくみとって、遂に執行猶予の判決を下しました。

た。私が法要から帰ると、妻は顔色を変えて「えらいことができました」と告げるので「何事がおこったのであるか」と聞くと「Wさんが次男を殺した」という記事が夕刊に出ています」と言っただけで出たのです。私も、そのあまりにも意外な出来ごとに驚いて言うことばすらなく、さっそく自転車で二里ばかり離れている本人の家へと走りまわりました。

この次男というのは、少し頭が狂っているようで、親に向かっても時どき乱暴を加えることがあり、近所にも迷惑をかける場合があつて、親としては、たえ難い悩みをかかえていたものです。ところがその父親のWさんは、若いころから、仏法に縁が厚く、常に寺に参つて聴聞を重ね、時には匿名で公共事業や、教化の面に献金などして、世間からは「感心な人だ」「真の仏法者だ」と褒められていた人物です。

その後、父のWさんは送検されて検事の取り調べを受けられたのでありますが、そのとき彼は「私は次男の頭が狂っていることをよく知っておりながら、私の浅ましい残忍性が出て、逆に次男を殺したのです。次男が悪いのではなく、重罪も甘んじて受ける態度をとりました。検事は彼の心情を察して、同情の心から「凶行のときはカッとなつて、無意識的に行動をとったのではないか」と念をおしましたが、彼はそれを否定して「決して無意識的にやったのではあり

その後、彼は寺に参りまして、「このたびは、まことに申しわけのない重罪を犯し、ご院主様を始めとして、皆様にご大変なご心配とお世話をかけて、お詫びの申上げようもありません。しかし私としては、このたびの事件で、今までの橋、慢心をコツピどく打ちたたかかれて、生涯信者顔のできない身にさせて頂いたことを心からありがたく喜んでおります」と、涙ながらに語りましたのには、私自身がまた頭の上らぬ感じをうけたのであります。(了)

も知れぬと心配したからです。本人の家に着いてみると、近所の人々はたくさん集まっております。本人は頭をうなだれて「なんとも申しわけがありません」と言っただけで涙を流しているばかりです。私は「出来たことは仕方がない。後の処置が大切であるから、念仏者として恥ずかしからぬ処置をとって下さい」と言っただけで帰りました。

そこで、今の厄介な次男について、「こういう子供を持つたも私の宿業のいたすところで、誰も怨みようはありません。どこまでも私が背負わねばならぬ業ゆえ、いかに彼が乱暴をしても、私はそれに対して暴力を加えようとは思いません」とハッキリ言っただけで、その日の朝のこ

その後、父のWさんは送検されて検事の取り調べを受けられたのでありますが、そのとき彼は「私は次男の頭が狂っていることをよく知っておりながら、私の浅ましい残忍性が出て、逆に次男を殺したのです。次男が悪いのではなく、重罪も甘んじて受ける態度をとりました。検事は彼の心情を察して、同情の心から「凶行のときはカッとなつて、無意識的に行動をとったのではないか」と念をおしましたが、彼はそれを否定して「決して無意識的にやったのではあり

その後、彼は寺に参りまして、「このたびは、まことに申しわけのない重罪を犯し、ご院主様を始めとして、皆様にご大変なご心配とお世話をかけて、お詫びの申上げようもありません。しかし私としては、このたびの事件で、今までの橋、慢心をコツピどく打ちたたかかれて、生涯信者顔のできない身にさせて頂いたことを心からありがたく喜んでおります」と、涙ながらに語りましたのには、私自身がまた頭の上らぬ感じをうけたのであります。(了)

# 現代真宗問答②

(先月号よりの続きです)

\* \*

の物なのですね」

B 「前号で、親鸞聖人がア

ミダ仏の用き<sup>はたら</sup>を無量のいのちと智慧と慈悲と仰せられたのを清沢満之師は智慧と慈悲は同じで、無量のいのちのことを無限の能力と表されたのですね」

A 「ええそうです。親鸞聖人はアミダ仏の用きを主に光明で説かれました。清沢師はアミダ仏を無限の能力と示して、私たちの存在をして存在たらしめている力とも言われたのです。いわば阿弥陀仏を存在論的に表されたのです」

B 「今ここに在る私の存在はアミダ仏の用き<sup>はたら</sup>によって成立しているといわれるのですね」

A 「ええ、そして私はいつでも今ここにしかいません。しかも一個の小さな物です」  
B 「そういう点で野に咲いている一つの花と同じ一つ

A 「ええそうです。しかしながら、フランスの思想家のパスカルが、『人間は一本の葦<sup>あし</sup>にすぎない。しかし考える葦である』

と云った様に、一個の肉体的な物でありつつ考える物であります。いわば判断し選択し行為するものです」

B 「人間は草や木と同じ一つの物ですけれども、判断し選択し行為する自由がある存在だということですね」

A 「ええそうです。身体という物でありつつ精神の自由があると云うことです」

B 「そのような規定、そのような構造はどうして発生したのですか」

A 「それは私の過去の宿業因縁によって定まったと仏教で云われています」

B 「宿業因縁とは」

A 「過去世における行い(業因)とさまざまな他の縁によつてということですね。そ

れによつてこの世に於て人という形(身心)を取ったと仏教では云われています」

B 「では、宿業因縁ということとアミダ仏の量りなきいのちとはどういう関係がありますか」

A 「宿業因縁によつて人という形をとっている、その全体が量りなきいのちに於て成り立っているのです」

B 「要するに人としてのいのちは量りなきいのちに依つてというか、量りなきいのちに於て成立しているのであつて、私の力によつてではないということですね」

A 「ええ、私の存在は我ならざる量りなきいのちのアミダ仏によつて可能なのですね。ただし、(人という形)は過去の宿業因縁によつてであるというのが仏教の間観です」

B 「いのちそのものはアミダ仏のいのちであつても、人としてのいのちの形は宿業因縁によつてということですね」

A 「ええそうです。喩えて

云えば、大海の波の大小さまざまな形は吹く風が原因(宿業因縁)によつて現れてきますが、波そのものはどんな波であつても海の水であつてあることに変わりありません。あるいは次のように喩えることもできます。しよう。大空に浮かぶさまざまな形をした大小さまざまな雲はそれぞれの縁によつて千差万別な形をしますが、全ての雲は大空(広大な大気)に於て、大空に依つて存在しているようなもので、大空をアミダ仏のいのちに喩え、いろいろな形の雲は生きとし生ける衆生に喩えられます。大空を離れて雲は存在しえません。そのように生きとし生けるものの形は業因縁によつて千差万別ですが、生きとし生けるものいのちそのものは平等にアミダ仏の無量のいのちのほかにはありません」

B 「よくわかりました」

A 「人の姿形はいろいろですし、人の振る舞いも千差万別ですね。人の行いの善

悪も違いがあります。そういう人の行い、振る舞いの善悪浄穢の違いがありましても、どのような人もアミダ仏のいのちの外に出ることはできませんし、離れることはできませんし、常にアミダ仏のいのちに結びついていきます。これは大きな恵みです。いつでもアミダ仏のいのちに携め取られていて捨てられないという真理の中にあります」

B 「どんな状態になり、たとえどんな過失をしでかしてしまつても、アミダ仏のいのちから離れることはないのですね。つねにアミダ仏のいのちに結びつけられているのは非常に有難い事ですね」

A 「ええそうなんです。どんなに絶望的な状態だと思つても、人はアミダ仏のいのちに携め取られている、アミダ仏に抱かれています、アミダ仏の大悲のいのちの中にいるということですね。ですからいつでも人はそこから立ち上がることも、生き直すことができるのです」  
B 「私はもう駄目だと思つ

でも、アミダ仏の大悲のいのちは私を見捨てずに私と共にましますのですね」

A「ええ、そうです。〈私はもうだめだ〉という思いは

どれほど強くても、私の存在はアミダ仏のいのちの中であり、アミダ仏のいのちは行き詰まりません。思いを超えて今ここに脈々として用いているのです。佐々木師の『法味寸言』の中に、

古往今来「行きつまり」なし。「行きつまり」は、人間の心がつくるのみ。

とか

いかなる場合でも道は開かれていく。行きつまるとは心の仕事。

とあります」

B「大谷派のお説教でよく〈思いは行き詰まっても、身の事実は行き詰まらない〉とか〈思いでは都合の悪いことが起こってきても身の事実は引き受けている。身の事実に帰れ〉などと聞きますね」

A「ええそうですね。そういう身の事実となつてくださっているのがアミダ仏の

寿命無量の用きですね。やさしく云えば、そういうアミダ仏に生かされている私たちですね」

B「身の事実というその事実は、アミダ仏が今この私をして私たらしめている存在の事実なのでですね」

A「ええそうですね。私たちがの思いに先立って、私たちは〈生きている〉のですね。

思い煩ったり心配するから生きておれるのではなく、

まず生きていから思い煩ったり心配したりするので

す。心配しつつあること自体、今ここに生きている証

拠です。今ここに生きていることそのことは何時でも

与えられている事実です。与えられているいのちです」

B「この事実が私たちの生の基盤になっているのです

ね。その基盤の中でさまざまな思いを起こしているのですね」

A「ええそうですね。アミダ

仏に生かされているにもかかわらず、私たちは〈思い

の私〉しか知らないのので、

悲喜苦楽の思いに振り回されてしまうのです」

B「自分の思いというのは自己中心的な思いですから、

自分の都合のいいことが来たら喜び、都合の悪いことが起ると悲しむという愛憎

悲喜の思いに縛られてしまうのですね」

A「ええ、そういえると思います。これについて、大

変優れた哲学者であった西

田幾多郎博士の歌に、

我が心 深き底あり

喜も 憂の波も

とどかじと思ふ

と詠まれた歌があります。

この歌は博士の身の回りで長男を亡くし、妻が動けぬ

身になり、娘が病気になるという不幸が重なっていた

時の歌です」

B「悲喜の波の届かない底に博士の眼は届いていて、

それに支えられておられたのですね」

A「ええ、困った、悲しい、

苦しい、うつとうしいとい

う思い（感情）によって、

こわれもせず、ゆらぎもせず、なくなりもしないのちが、私の生きている地盤

れて生き抜いていかれたのだと思います」

B「〈深き底〉についてももう少し詳しくおっしゃって下さい」

A「ここは大事なところで、

仏教はここに目覚めることを説く宗教だといっても過

言ではありません。〈我が心 深き底あり〉といつても、

私の心の中とか心の奥とい

う意味ではありませんし、

私の存在の外のものではありません。内でありながら

外のものであり、外のものでありながら内である、そ

ういう用きです。我ならざるアミダ仏の用きでありな

がら、私の存在（身心）がそれによって成り立ってい

る、そういう用きが今この自己存在の根柢になつて

いるのです。それを〈深き底〉といのです」

B「難しいですね」

A「ただ〈深き底〉といつても、今ここで見たら聞い

たり触れたりしつつあることと別にある底ではありません。底であると共に見聞

私のいのちそのものであり、私の存在の根柢であり、私のいのちを掴んでいるものであるという真理を親鸞聖人は〈撰取不捨の真理〉といわれたのでしよう」

B「アミダ仏は私を超えた用きでありつつ、私と一体になつている用きなので

ね」

A「ええそうですね。どんな

に心が揺れ動き、苦しみ、

煩い悩むとも、アミダ仏は私と共にいて下さり、私を

抱いていて下さっているのです」

B「親鸞聖人は、煩惱具足の身でありながら、有難い

事にアミダ仏の大悲のいのちに撰取取られているとい

うアミダ仏と人との撰取不捨の关系的真理を教えて下

さるのですね」

A「ええ、そう言えるでしょう」

B「ではそういう撰取不捨の真理にどうしたら目覚め

られるのですか」

A「その問題は本願の念仏のお話になりますので、次

号に述べたいと思います」

# 信心夜話

○火事と自ら気付いて逃げ出す人もあり。火事と知らされて、逃げ出す人もある。火事だと呼ばれても、火の付いた家に気付かず、寝ている赤子もいる。平気で寝ている赤子を、抱きかかえて逃げ出すよりほかには助かる道はない。

吾々は何と云われても火の付いた世界、火宅無常の世界と聞かされても、それを本当に気付かない。平気で暮らしているこの私に、阿弥陀さんが私にとび込んで来て下され、私を抱きかかえて下さる、其の御姿が、今現にこの口に聞こえてくださる。

## 南無阿弥陀仏

〔松並松五郎念仏語録』より〕

\* \* \*

身体も心も世界も無常で変化しづめである。縁が来

れば明日も分からぬ危ない身である。何一つ本当に当てるものではなく、確かなものはこの世に一つもない。人生そのものがはかなく、全ては過ぎ去っていくという無常の事実自らが目覚めて本当に確かなものを求めて求道する人もいます。

また親や子が死ぬなどの縁にであったり、あるいは仏法を聞いて無常転変の身であることを感じ、(これはいかん、なんとか揺るぎのない確かなのちに目覚めたい)と出家して真理を求め人もあります。以上のような人たちは上品であります。

祖父母や親が死んでも、その時は淋しいがしばらくすると元の状態に戻り、世の中の紛争や大地震や津波が来て多くの人が亡くなっても対岸の火事にしか感じ

ない。自分は何時でも大丈夫とたかをくくっている。こういう人を下品という。下品の人の姿をここでは火事で火の付いた家の中で平気で寝ている赤子に喩えておられる。これが私たち凡夫の姿であると松並さんはいう。

アミダ仏は、この世は火宅無常の世であり、人は一息一息の所でしか生きていないのであり、死してどこに行くのかを知らぬ危ない身であると、本当に知り尽くして、無常を何とも思っていない凡夫を、助けようと急いで来て下さって、はっきりなき大悲のいのちを私たちに与えて抱いて下さる。松並さんは、

「阿弥陀さんが私にとび込んで来て下され、私を抱きかかえて下さる、其の御姿が、今現にこの口に聞こえてくださる。南無阿弥陀仏」と。火事の家の中でねむりこけていているような私の所に、火の中過ぎて急いで飛び込んできて下さって、「ここにいます。抱いている。連れて行く」と仰せ下さる

お声が、いま口に聞こえる南無阿弥陀仏とは。

にもかかわらず、重い重い一声のお念仏を軽く軽く聞いている私がいる。今この私まで来て抱いていて下さり、火宅を脱出させて下さるアミダ仏でなくては火宅から一步も出れません。(了)



## 【住職雑感】

昨年十一月二十六日、幡谷明先生(大谷大学名誉教授)が満九十三才で往生されました。大谷大学に入学して一回生の時の担任で、「真宗」の講義を聴かせてもらったのが最初の出会いでした。先生は多くの人とのお交わりを厭わないお方で、おかげで私のような一学生にも目を掛けて下さり、島根県の浜田のご自坊から京都へ行かれる途中に岡山県津山の我が家に泊まりに来て下さったことがあります。そして一緒に真宗光明団に縁の深い作陽短期大学(当時)の理事長であった松田氏と一緒に訪ね、帰りに城山を散策したことが懐かしく思い出されます。その時、「津山の本屋は

充実している」と言われたのが印象的でした。その後、しばらく疎遠になっていましたが、四十才になって大谷大学の聴講生になってまた大学でお会いし、そして一度浜田の自坊の報恩講で話をしなにか」と誘われ、二度ほどご自坊の報恩講に寄せて頂きました。

思い出すのは先生が娘さんを亡くされてほどなく本山の安居の講師をされ、大阪の難波別院でもお話がありました。その時は大変辛い中だったと思います。また私の作った私家版の本を批評して人にも勧めて下さいました。晩年はお体がいろいろ不自由になられ、この二年ほどはコロナ禍の中、耳も聞こえず目も見えず人にも会えずで、大変寂しい思いをされたのを思うと胸が痛みます。そしてこの度、苦の身を捨てて浄土に往かれたのであります。先生は常に真宗学のいろいろな問題に関心を持続し思惟し、私たちにも問いかけるといふ学究の道を生涯貫かれたのでした。ご自坊の先生の書庫は目を見張るほどの蔵書でした。先生は実に人との対話・出遇いを喜び、多くの真宗学徒に真宗の学びへと励ました下さったお方であります。先生とご縁を深く感謝しております。